

南アフリカ共和国の第2回全人種参加総選-焦点と結果(特集 2南アフリカ総選挙)

著者	牧野 久美子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1999-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008374

南アフリカ共和国の 第2回全人種参加総選挙

焦点と結果

牧野 久美子

1999年6月2日、南アフリカ共和国で全人種参加のものとしては第2回目の総選挙が行なわれた。初めて平等な「一人一票」が実現した歴史的な94年選挙に引き続き、アフリカ民族会議 (African National Congress: ANC) が圧勝し、かねてより政界引退を表明していたマンデラ (Nelson Mandela) に代わり、前政権で副大統領を務め、97年末からはANC党首の座を引き継いでいるムベキ (Thabo Mbeki) が、6月16日、新大統領に就任した。本稿では、世論調査の動向なども参照しながら、南アフリカの99年総選挙の焦点を結果を振り返り、その意味を探ることとした。

1 国民統合政府への有権者の評価

今回の選挙は、5年前に誕生した国民統合政府 (Government of National Unity: GNU) の評価が問われた選挙であった。

GNUは1994年選挙に先立つ民主化交渉のなかで

生み出された制度で、5%以上の得票をした政党には議席数に応じた数の閣僚を出し連立政権に参加する権利を与えるという暫定憲法 (93年制定) の規定に基づくものである。この制度に基づき、94年4月に行なわれた初の全人種参加総選挙の結果、全有効投票の62.65%を獲得したANC、旧政権党の国民党 (National Party: NP)、およびクワズールー＝ナタール州に地盤を持つインカタ自由党 (Inkatha Freedom Party: IFP) の3党が連立を組んだ (ただし、のちにNPが離脱するので、99年選挙の時点でGNUを構成していたのはANCとIFPの2党であった)。

GNUは復興開発計画 (Reconstruction and Development Programme: RDP) を政策の柱としたが、アパルトヘイトによって歪められた社会経済構造を変革しようというRDPの理念を実施に移すにあたっては、省庁間、各レベル政府間 (南アフリカの政府は中央、州、地方の3層構造となっている) の調整の難しさなど、さまざまな問題が露呈してきた。

しかし、5年間を振り返れば、アパルトヘイト下で政策的に無視されてきたアフリカ人貧困層のニーズに応える成果が、徐々にではあるが上がってきたと言えるだろう。例えばこの5年間に、新たに400万人が清潔な水を得られるようになり、70万戸の住宅が新たに建てられ、6歳未満の幼児について保健医療が無料となった。南アフリカ放送公社 (South African Broadcasting Corporation: SABC) などが99年選挙に向けて共同で実施した世論調査によれば、選挙直前の99年4月の調査時点で、基本的サービス (水・電気) については72%、保健医療について66%、当初目標からのペースの遅れがしばしば指摘される住宅問題についても61%が、政府のパフォーマンスについて肯定的な評価をしている。

一方で、有権者の評価が低いのが雇用創出と犯罪対策の二つの分野である。同調査において、雇用について24%、犯罪については26%が政府の取り組みを肯定的に評価するにとどまっている。これらはまた、満足度が最も低いと同時に、最重要課題として言及されることが最も多い問題でもある。南アフリカの失業率は全体で33.9%、アフリカ人だけで見ると42.5%にのぼり、雇用創出はGNU発足当初から常に有権者の最大の関心事であり続

けてきた。犯罪のほうは、殺人こそ横這いあるいは減少傾向にあるとも言われるが、強盗やレイプは増加の一途を辿っており、1994年選挙時に深刻だった政治的暴力が収束するのに代わって最重要課題に浮上した (以上, SABC/IDASA/Markinor, Opinion '99 <<http://www.idasa.org.za/pos/op99/>>による)。ただし、これらの問題への関心が有権者全体に等しく共有されているわけではなく、失業が深刻なアフリカ人の間では雇用への関心が非常に高いのに対し、失業率が4%台に留まる白人有権者にとっては、犯罪が圧倒的に他を引き離して最大の関心事となっている (*Public Opinion on National Priority Issues: Election '99*, Pretoria: Human Science Research Council, 1999, p.24)。

2 1999年総選挙の焦点

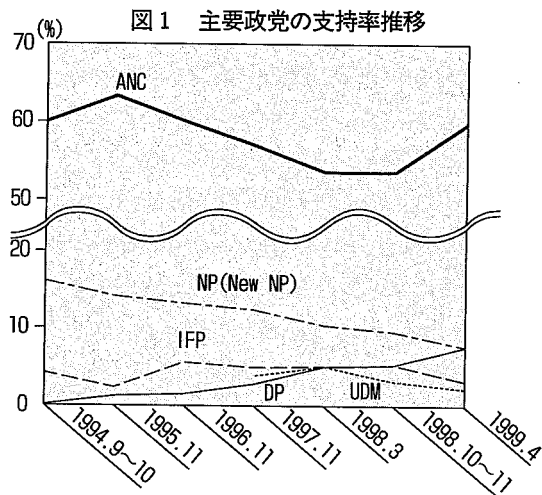
このようなGNUの光と影を見れば容易に想像がつくことだが、ANCが今回の選挙にあたって5年間の成果を強調し、路線継続への支持を訴えることによって選挙戦を有利に進めようとしたのに対し、野党は失業と犯罪の二大問題における政府の失敗を有権者に印象づけ、とくに犯罪対策の手ぬるさを徹底的に批判するという戦術をとることに



投票の順番を待つ人たち。2時間待ちはザラ。

プレトリアの集計センター。全国の投票所の開票結果は、すべてここに集められる。





(出所) Opinion '99 Series 4, "Party Support and Voting Intention," May 1999.

なった。民主党 (Democratic Party:DP) は「ファイト・バック」というスローガンを掲げ、犯罪その他の社会問題に断固とした態度をとる、との政党イメージをアピールした。また、南アフリカは1995年に死刑制度を廃止したが、NPをはじめとして死刑の復活を訴える政党も多かった。

もっとも、ANCの圧倒的優位が揺らぐことはなく、ANCが単独での憲法改正が可能となる全体の3分の2以上の議席を獲得するか、および第2党 (official opposition) の座をどの政党が獲得するか、の2点が国政レベルでの選挙の焦点であったと言えるだろう。第1の点は前回選挙でも焦点となったが、GNU制度を1999年選挙後に廃止し、通常のマジョリティ・ルールに移行することが97年施行の新憲法により決まっており、GNU制度の継続を望んでいたがかなわず新憲法採択後の96年6月にGNUを離脱したNP、および「小さな政府」を志向するDPとも、ANCが3分の2を獲得することが南アフリカの民主主義にとってマイナスである、との印象を選挙戦を通じて有権者に植え付けよう

とした。また、第2党争いについては、前回選挙で20%余りを得票して第2党となったが、以後一貫して支持率を下げ続けたNPと、前回選挙で惨敗したものの新党首レオン (Tony Leon) のもて存在感を強めてきたDPとが、選挙直前99年4月時点の世論調査で支持率約7%で並ぶに至った (図1)。

また、国政選挙と同時にに行なわれる州議会選挙において、前回ANCが敗北した2州 (NPが勝利した西ケープ州、およびIFPが勝利したクワズールー=ナタール州) の結果も注目された。

3 総選挙結果

●DPの躍進, NPの凋落●

選挙前には一部地域で支持者間の対立も見られたが、緊張の高まっている地域の警備を強化したことも功を奏して、暴力事件もなく平穏な雰囲気なかで6月2日、投票が行なわれた。人文科学調査評議会 (Human Science Research Council: HSRC) の出口調査によれば96%が今回の選挙を「自由かつ公正」と評価した。集計段階において一部投票所の票数が二重にカウントされ、後で訂正されるミスなどはあったが、大きな問題もなく選挙の全プロセスが終了、週明けに独立選挙委員会によって最終結果が発表された (表1, 表2)。

ANCは予想どおり圧勝したものの、得票率66.35%で国民議会400議席中266議席と、全体の3分の2にわずか1議席及ばなかった。もっとも、この結果はANCにとっては何ら惜しむべきものではなく、3分の2以上を獲得した場合の危険性を野党が喧伝し警戒感を煽っていたことを考えれば、むしろ対外的に安心感を与えるという意味で好ましい結果ですらあったと言える。

第2党争いは、選挙前の勢いのままDPが9.56%

表1 国民議会選挙結果

政 党	1999			得票率の 増減(%)	1994		
	得票数	議席数	得票率 (%)		得票数	議席数	得票率 (%)
アフリカ民族会議 (ANC)	10,601,330	266	66.35	+3.70	12,237,655	252	62.65
民主党 (DP)	1,527,337	38	9.56	+7.83	338,426	7	1.73
インタカ自由党 (IFP)	1,371,477	34	8.58	-1.96	2,058,294	43	10.54
新国民党 (New NP)	1,098,215	28	6.87	-13.52	3,983,690	82	20.39
統一民主運動 (UDM)	546,790	14	3.42	-	-	-	-
アフリカ・キリスト教民主党 (ACDP)	228,975	6	1.43	+0.98	88,104	2	0.45
自由戦線 (VF/FF)	127,217	3	0.80	-1.37	424,555	9	2.17
統一キリスト教民主党 (UCDP)	125,280	3	0.78	-	-	-	-
パン＝アフリカニスト会議 (PAC)	113,125	3	0.71	-0.54	243,478	5	1.25
連邦同盟 (FA)	86,704	2	0.54	-	-	-	-
マイノリティ戦線 (MF)	48,277	1	0.30	+0.23	13,433	0	0.07
アフリカーナー統一運動 (AEB)	46,292	1	0.29	-	-	-	-
アザニア人民機構 (AZAPO)	27,257	1	0.17	-	-	-	-
その他	28,866	0	0.18	-	145,863	0	0.75
計	15,977,142	400	100.00		19,533,498	400	100.00

(出所) 独立選挙委員会ウェブサイト (<http://www.elections.org.za>) などをもとに筆者作成。

を得票して勝利、「新国民党」(New National Party)と改名して臨んだNPは前回3位のIFPにも及ばず第4位に終わった。1994年選挙と比べると、ANCは得票率こそ微増しているものの得票数では前回を下回っており、上位4党のなかで得票数を伸ばしたのはDPのみで、前回の5倍以上の議席を獲得し一気に野党第1党に躍り出たDPの勝利が際立っている。ANCを除名されたホロミサ (Bantu Holomisa)とNPを離党したメイヤー (Roelf Meyer)が97年に立ち上げた新党、統一民主運動 (United Democratic Movement:UDM)は第5位に終わった。

また、注目された前記2州では、クワズールー＝ナタール州ではIFPが第1党の地位を守る一方、西ケープ州ではANCがNPに雪辱を果たした。各州議会の選挙結果を見ても、DPが躍進しNPが凋落するという傾向がはっきりと見て取れる。

NP惨敗の要因はいくつか考えられる。一つにはデクラーク (F.W.de Klerk)元大統領から党首を

引き継いだファン＝シャルクヴェイク (Marthinus van Schalkwyk)の指導力不足があり、選挙後に党首への激しい不満を新聞におちまけるNP議員もいた (*Weekly Mail & Guardian*, June 4, 1999)。しかし、より根本的には、GNU離脱後のNPが方向性をめぐって迷走したことが大きく影響したと言えよう。NPは白人以外に支持を揚げようと改革を図ったが、改革路線の先頭を走り次期党首と目されていたメイヤーが離党し、保守派が巻き返すに及んで、改革は中途半端なまま挫折した。その後もNPは党名を変更するなど過去のイメージ払拭に躍起であったが、むしろ支持基盤の核をなしてきた白人有権者のNP離れを招くことになった。DPの支持率上昇とNPの支持率低下はきれいな対照をなしており、DPはNPの支持層を切り崩すことで躍進したことが窺えるが(図1)、この点について政党支持構造を人種集団別に見てみると興味深いことがわかる。かつてアパルトヘイトを推進してき

南アフリカ共和国の
第2回全人種参加総選挙

焦点と結果

表2 州議会選挙結果

州 (定数)	政 党	議席数	1999	増 減	1994	州 (定数)	政 党	議席数	1999	増 減	1994	
			得票率 (%)	(%)	得票率 (%)				得票率 (%)	得票率 (%)	得票率 (%)	
東ケープ州 (63)	ANC	47	73.8	-10.6	84.4	ムブマランガ州 (30)	ANC	26	84.8	+4.1	80.7	
	UDM	9	13.6	-	-		DP	1	4.5	+3.9	0.6	
	DP	4	6.3	+4.2	2.1		NP	1	2.5	-6.5	9.0	
	NP	2	3.2	-6.6	9.8		FF	1	1.7	-4.0	5.7	
	PAC	1	1.1	-0.9	2.0		UDM	1	1.4	-	-	
フリー ステート州 (30)	ANC	25	80.8	+4.2	76.6	北ケープ州 (30)	ANC	20	64.3	+14.6	49.7	
	DP	2	5.3	+4.7	0.6		NP	8	24.2	-16.3	40.5	
	NP	2	5.2	-7.4	12.6		DP	1	4.8	+2.9	1.9	
	FF	1	2.1	-3.9	6.0		FF	1	1.7	-4.3	6.0	
ハウテン州 (73)	ANC	50	67.9	+10.3	57.6	北部州 (49)	ANC	44	88.3	-3.3	91.6	
	DP	13	18.0	+12.7	5.3		UDM	1	2.5	-	-	
	NP	3	3.9	-20.0	23.9		NP	1	1.7	-1.6	3.3	
	IFP	3	3.5	-0.2	3.7		DP	1	1.4	+1.2	0.2	
	UDM	1	2.0	-	-		PAC	1	1.4	+0.1	1.3	
	FF	1	1.3	-5.0	6.2		ACDP	1	1.1	+0.7	0.4	
	ACDP	1	1.2	+0.6	0.6		北西州 (33)	ANC	27	79.0	-4.3	83.3
	FA	1	0.9	-	-			UCDP	3	9.6	-	-
クワズールー= ナタール州 (80)	IFP	34	41.9	-8.4	50.3	DP		1	3.3	+2.8	0.5	
	ANC	32	39.4	+7.2	32.2	NP		1	2.3	-6.5	8.8	
	DP	7	8.2	+6.0	2.2	FF	1	1.4	-3.2	4.6		
	NP	3	3.3	-7.9	11.2	西ケープ州 (42)	ANC	18	42.1	+9.1	33.0	
	MF	2	2.9	+1.6	1.3		NP	17	38.4	-14.9	53.3	
	ACDP	1	1.8	+1.1	0.7		DP	5	11.9	+5.3	6.6	
	UDM	1	1.2	-	-		ACDP	1	2.8	+1.6	1.2	
						UDM	1	2.4	-	-		

(注) 議席を獲得した政党のみ記載。太字で表記されている政党が各州与党。

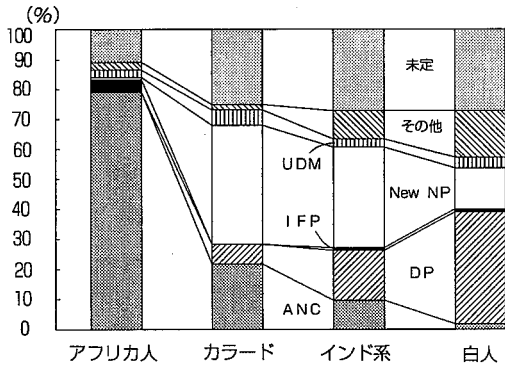
(出所) 独立選挙委員会ウェブサイト (<http://www.elections.org.za>) などをもとに筆者作成。

たNPが、白人よりもむしろカラードやインド系人の支持に依存しており、逆にアパルトヘイト期に人種差別反対を唱えたりベラル政党の流れを汲むDPのほうが白人政党的な様相を呈しているのである(図2)。

アパルトヘイト期、カラードやインド系人は白人の下、しかしアフリカ人よりも上という中間的な地位を与えられていた。彼らが1994年選挙でANCよりもNPに多く投票したことはよく知られている

が、これはANCがアフリカ人を優先する政策を採り、程度の差こそあれアパルトヘイトにより差別されてきたカラードやインド系人の利害がないがしろにされるのではないかとの危惧からだったと解釈されている。しかし、94年時点では、NP支持層の核は明らかに白人であった。94年選挙では、290万人の白人有権者のうち190万人がNPに投票したと推計されている。いっぽう、NPに投票したカラード、インド系人はそれぞれ120万人、30万人程

図2 人種集団別の政党支持構造 (1999年4月)



(出所) Opinion '99 Series 4, "Party Support and Voting Intention," May 1999.

度であったとされる (A. Reynolds, ed., *Election '94 South Africa: The Campaigns, Results and Future Prospects*, New York, St. Martin's Press, 1994)。それから5年後、DPはNPに代わって白人有権者に最も支持される政党となった。さらに、99年と94年の西ケープ州議会選挙結果を比べると、ANCもまたNPの支持層を奪うかたちで今回の選挙で票を伸ばしたことがわかる。西ケープ州の人口構成(カラードは西ケープ州の人口の半数以上を占める)や白人の間でANCへの支持が低いことを考え合わせれば、今回の選挙でANCに鞍替えしたのはカラード有権者が大半であろうと推測される。NPは、白人支持層をDPに奪われ、カラード支持層をANCに奪われ、一人負けを喫したのである。

国民議会で安定過半数を確保したANCは、GNU制度が廃止されたため単独で政権をとることも可能であったが、NP離脱後のGNUと同じく、IFPと連立を組むことになった。また、クワズールー=ナタール州でも同様にこの2党による連立政権が成立した。しかし、西ケープ州では連立政権をめぐって選挙後に一混乱あった。雪辱を果たし

たものの過半数に届かなかったANCは、カラードを支持基盤として共有していることを強調してNPに連立を迫ったが、NPはANCではなくDPと連立することを選んだからである。これにより、NPは州与党第1党の座と州知事ポストを引き続き確保したのだが、第1党のANCを排除する形で連立政権が成立したことから、ANC支持者は強く反発、州議会を取り囲む抗議行動に発展した。こうして結果的には、国政レベル・州レベルとも、与党の顔ぶれは選挙前と同一になった。

▲おわりに

1回目に比べて2回目の選挙は難しいとも言われるなかで (M. Bratton, "Second Elections in Africa," *Journal of Democracy*, Vol.9, No.3, 1998), 南アフリカは2回目の選挙を成功させ、民主主義の定着を全世界にアピールした。支持者が白人に偏るDPが第2党となってANCとの対決姿勢を強めていることは、マンデラを国民統合の象徴として人種融和を進めてきた後で、再び南アフリカにおいて人種のラインを政治対立の主要軸として浮上させかねないとの懸念を呼び起こしてもいる。しかし、野党の存在感が増して議会での実質的な政策論議が促されるならば、南アフリカの民主主義の深化につながることも期待される。

犯罪や失業、旧ホームランド地域を最底辺として依然残る格差と貧困など、ムベキ新政権が直面する難題は多い。しかし、少なくとも今回の選挙は、これらの課題への取り組みが民主主義を前提に進められることを確認したと言えるだろう。

(まきの・くみこ/地域研究第2部)